

訪問看護推進事業 医療型多機能サービス

施設名：医療法人あいち診療会 あいち診療所野並

発表者：中河亜由美（言語聴覚士）

今回、施設など在宅以外の生活の場への訪問リハビリテーションのモデル事業を行った。その際の、ある利用者との関わりをご報告する。

<はじめに>

当モデル事業の目的は重症心

身障害児・者の在宅療養を充実させる事と定めた。

概要は訪問看護ステーションに所属するリハビリ専門職が重症心身障がい児・者の日中預かり施設に訪問し、個別訓練によりリハビリ専門職の立場から専任医療職の雇用が困難な施設の介護者の介護負担軽減を目指すものである。

期間は10カ月。対象者は3名であったが、このうち1名の対象者Aとの関わりを取り上げる。

<実施内容>

対象者：5歳女性、疾患は福山型筋ジストロフィー、
口唇口蓋裂術後、言語発達遅滞

初回評価

全般的な発達評価

KIDS 乳幼児発達スケール：発達年齢0歳10カ月

津守稲毛式乳幼児発達質問紙：総合発達年齢0歳10カ月

日常の様子：コミュニケーション意欲は比較的高く、周囲の介護職員に対して指差しや発声、肩をたたくといった行為によって自分に注意を惹く。主な発語は「あー、あー」、「ばーやん」、「ばいばい」の3語に限られていた。

目標

長期目標：日常生活において第三者にも伝わる具体的な意思・要求の表出手段を身につける

短期目標：1,聴覚的理解の促進

2,簡単な日常語の音声表出の獲得

3,日常物品を身振りによって示すことができる

訓練計画

#1 コミュニケーションの基礎学習

#2 意思表出のための指差し・ジェスチャーの強化

#3 言語コミュニケーションの強化

これらの計画に基づいた訓練として、物の受け渡し、言語刺激の強化、指差し・ジェスチャーを行った。

具体的な内容は、物の受け渡しでは第3者、あるいはぬいぐるみを使用して物のやり取りを行う際に「どうぞ」、「ありがとう」と見本を見せた。また、対象者Aの言葉を代弁することも行った。

言語刺激の強化では、物やカードに注目させ、同時にその名前を聞かせて物には名前があることを理解してもらおうと考えた。

指差しやジェスチャーでは物を見せながら使い方の動作を行ったり、対象者を車椅子に乗せて指差した通りに進んでいく課題を行った。

再評価

全般的発達検査

・ **KIDS** 乳幼児発達スケール：発達年齢1歳2カ月向上。

・ 津守稲毛式乳幼児発達質問紙：総合発達年齢1歳0カ月向上。

日常の様子：身振りと言語を合わせて行う行動が見られるようになった。他者の行動・言語を即時に模倣できるようになった。

物の受け渡しの課題では、物を渡す時に「どうぞ」、物を受け取ると「あーとー」という発語が見られるようになった。このやり取りは、初見の他者に対しても進んで行おうとしており、人とコミュニケーションを築く手段として認識されたようである。

言語刺激の強化では、人の口を見つめて傾聴する様子がよく観察されるようになり、看護師からも、人の言葉を繰り返すことが多くなってきたという感想があった。

そして、指差し・ジェスチャーでは、訓練開始時は、指差しの方向が定まりませんでしたが、2月には、「散歩の

際、指差す通りに進んだら、ちゃんと戻ってこられた」という看護師の話も聞いた。

このことから、動作と示したいものの関係が理解されたと考えられる。

<まとめ>

訓練以前から対象者 A は他者への関心も高く、コミュニケーション意欲は比較的高かったが、言語に関しては大きく発達の遅れが見られていた。しかし、訓練開始後物のやり取りの課題では動作と言語が同時に表出できるため、コミュニケーションを図りつつ言語の表出を促すことが可能になった。集中力に関しても、はじめは 10 分弱が限界であったのに対し、現在では 25 分間持続可能になっている。

介護者である母親は「これまでの何もかも自分でやらなければいけないというプレッシャーから解放され、専門家に任せる必要性を感じ、自分自身の役割は言語訓練後をフォローする事であると認識した。」という感想を持ってくださった。

<今後の課題>

このモデル事業を終え、対象者に対してサービスの効果を実感した。

今後の課題は、実際にやってみて難しいと感じた他職種や家族への指導や報告等の情報の共有を徹底すること。また、今回のようなサービスが提供できる「場」がもっと拡大されることであると考えている。